

Guitar Talk

V O L . 3

JAMES TYLER

ギターというものは、各部分が助け合い
高め合うように作るべきなんだ。

By Yasuhiko Iwanade

アメリカと日本のギター事情を自由な角度から紹介していこうというこのコラム。今回はロサンゼルス近郊VAN NUYSに本拠地をかまえるジェームス・タイラーをとりあげたい。

南カリフォルニアはその自由闊達な気風から数多くの優れたギター・メーカーを輩出している。このタイラーも基本的な部分ではしっかりと伝統を踏まえながら、進化した現在のミュージック・シーンに対応した斬新さを持つという点でその良い例と言えるだろう。

1951年ロサンゼルスに生まれたジム（ジェームス）タイラーは、ローティーンからハイティーンにかけてエリック・クラプトン、ジミ・ヘンドリックス、バースといった当時の最先端のロックの洗礼を受ける。やがて自らもギタリストとしてのバンド活動を始めるわけだが、その後音楽人間の彼がハードウェアとしてのギターの世界に入ったきっかけは、自分のギターのリペアからだった。ミュージシャンとしての自分の細かい要求を満たしてくれるリペアマンが見つからないまま、少しずつその知識と経験を増やしていくうちに、その技術は周囲のミュージシャンたちの知るところとなっていった。

やがてリペアを本格的に仕事とする決心をしたジムは、最初にピンテージ・ギターで有名なノーマンズ・レア・ギターのリペア・スタッフとして仕事を始める。72年のことである。ピンテージ・ギターのエキスパートとしては世界でも指折りの店で仕事をするることによって、さらにその腕に磨きをかけた彼は数年後独立。リペアと小売を業務とする店を開く。スタジオ・ミュージシャンを中心として顧客の輪が広がっていく中、次第に増えていったのはハイ・クオリティなコンポーネント・ギター製作の仕事だった。初めはリペアの延長のつもりだったものが、ついにはその要望の多さに片手間でではできないと判断。86年には業務内容を大きくシフトしてジェームス・タイラー・ブランドのギター&ベースの製作に専念することとなる。

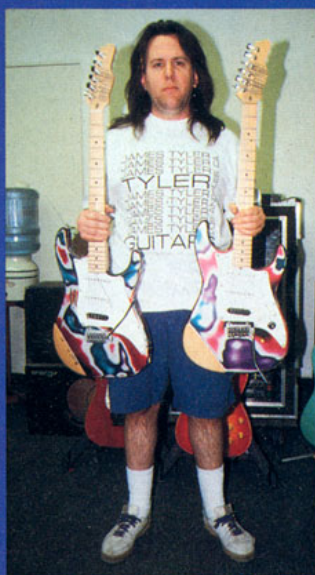
有名なマイケル・ランドウ・モデルを始めとして、現在のラインはそのひとつひとつがはっきりとした主張を持ったものだが、各々については写真キャプションを読んでもらうことにしよう。

この他、生産本数を絞った厳しい品質管理や、ピックアップなどのパーツについてはセイモア・ダンカンやリンディ・フレアリンなど業界のトップ・メーカーたちと協力し、カスタム・スペックのものを開発している点も、彼の製作に対する姿勢を表わすものと言えるだろう。

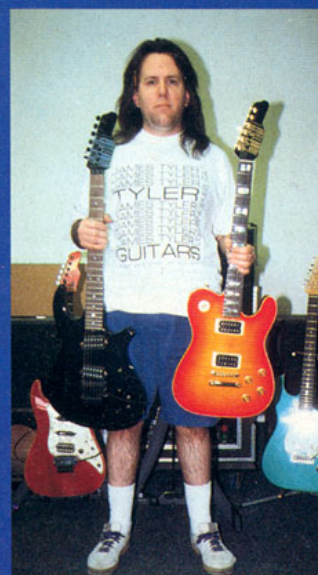
プレイアビリティとトーン、またそのデザイン・センスで群を抜いているタイラー。「結局ギターというものは各部分が助け合い高め合うように作るべきなんだ」と彼は言う。そしてそれは彼のミュージシャンとしてのセンス、クラフツマンとしての深い知識と経験が融合して初めて可能になったものと言えるだろう。



●左からスタジオ・エリート、ピックガード付きハイジョン、マングース、クラシック、クラシック50。アンプはどれもジム本人のコレクションだが、その中でも右端にあるツィードのバンドマスターは絶品である。



●2本ともマイケル・ランドウ・シグネチャー・モデルだが、コンター部分にナンバーの入っていない右側のモデルが、本人が実際に使用していたものだ。



●左が「アルティメイト・ウェポン」、右が「マングース」モデル。マングースはフレーム・メイブルのカブド・トップである。



●ボディ外形用のジグ。アルティメイト・ウェポン用で、ベークライトという素材で作られている。



●これはネック・ポケット、ブリッジ、コントロール・キャビティをルーターでカットするためのジグだ。おそらくピックアップのキャビティはS-S-H、S-S-S、などのコンポーネーションのプレートが別になって、それらをフレキシブルに組み合わせるのだろう。

●これはベース用の外形テンプレート（治具=ジグ）。

SPECIAL THANKS : JAMES TYLER



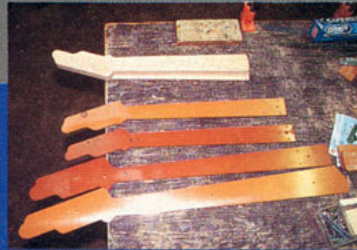
プロフィール 岩瀬安彦 53年生まれ。東京都出身。ミュージシャン、楽器小売店を経て独立。“ギターリックス”を設立し、オールド楽器の輸入販売・リペアとギターの製作を開始。その後その知識・製作技術をかね、米国フェンダー社カスタム・ショップでマスター・ギター・ビルダーを務める。83年帰国し、現在はギター・デザイナーとして、また設計・製造・販売を含む総合コンサルタントとして日米双方の楽器業界に大きく貢献している。



●作業の途中の段階でラックに置かれたボディとネック。



●バンドソーでおおまかにカットされたネック材。手前はベースのためのプランク。中央にはまた板状のものが見られる。奥には美しい木目の入ったものもある。



●ベークライトで作られたネック用のテンプレート。奥の2本はどちらもギター用だが、ヘッドの大きさが微妙に違っている。手前の2本はベース用。明らかに幅が違うことから、一番手前のものが5弦用ネックであることがわかる。



●指板を接着する前のベース・ネック。よく見るとボディ側の裏に近い部分に、トラスロッドを挟み込むようにして補強材が仕込まれているのがわかる。



●塗装工程前の生地ボディ。5弦ベースのもので、センター・ピースがアルダー。両側にはMAMYWOというマレーシア産の材が使われている。

●2台のタイラー・ベースを手にするジム・タイラー。四方共5弦で、ピックアップにはカスタムメイドのバルトリーニを使用している。左上のラックにかかっているギターは、彼が自分の好みのスペックで製作した、いわばシグネチャー・モデルである。



●下廻りが濡いたところでサンディング作業を始める。



●作業にはかなり特殊なマシンが使われる。この2台はサンダーだ。

●作業場の一部、奥の奥の2台の機械はミリング・マシンと呼ばれる。中央には指板を接着中のネックが見える。